2307　離島覚書（東京都・八丈島）

ウキペディアより引用

令和５年３月９日

八丈島空港

羽田空港を 15 分ほど遅れて出発したＡＮＡ1891 便（ボーイング 737-800、定員 166 名）は８時 45 分に八丈島空港に着いた。座席は６割方埋まっていた。八丈島に来るのは３度目である。最初は全漁連からの委託調査（漁業とダイビング事業との利用調整）で、２回目は青ヶ島の帰りに立ち寄り、１日かけて島を一周した。

八丈島は東京の南、約 300 ㎞に位置する孤島で、属島として無人島の八丈小島を抱える。島は２つの火山がくっついてできた瓢箪型をしている。北西の山が円錐形をした八丈富士（854.3m）、南東の山が三原山（700.9m）だ。八丈島空港はちょうど２つの山の谷あいにあたる平坦な地につくられている。

空港の歴史は古く、1927（昭和２）年にできた旧海軍飛行場を起源とする。その後、滑走路は段階的に延長され、現在の 2,000mになったのは 2004（平成 16）年 10 月のことである。現在は羽田空港との間にジェット機が１日３便就航している。羽田から八丈島までの所要時間は約 55 分。ジェット機の他に東邦航空（東京愛らんどシャトル）のヘリコプターが青ヶ島と御蔵島との間を結んでいる。

八丈島への交通のもう１つが東海汽船の船舶で、竹芝桟橋と八丈島の神湊港（底土（そこど）港）（都では神湊港としているが、神湊漁港との混同を避けるため、ここでは地元で一般的に使われている底土港とする）を結んでいる。22 時 30 分に竹芝桟橋を出発した船は三宅島、御蔵島を経由して、翌朝８時 55 分に八丈島に着く。こちらの所要時間は 10 時間 25 分だ。

八丈島への来島者は、コロナ禍以前は 10 万人前後で推移していた。利用交通機関は空路が圧倒的に多く、空路と海路の比率はおおむね５：１であった。

島の面積は 69.11 km^2 で伊豆諸島の中では大島に次いで大きい。また海岸線の長さは 51.3 kmで、大島よりも少し長い。八丈島は大島と並び伊豆諸島を代表する島なのだ。

予約していたモービルレンタカーの迎えの車に乗り、市街地にある営業所へ向かう。私の他に、仕事で来たと思われる３組がワンボックスカーに同乗した。

空港の北側には八丈空港道路が整備されており、街路樹にビロウヤシが規則正しく植えられていて美しい。南国の風情が来島者を歓迎する。モービルレンタカーは市街地の中心部にあり、ガソリンスタンドとレンタカーを兼業していた。軽自動車を２日間借りた。

八丈島空港ターミナル（左）、２つの山の間につくられた飛行場（右）

東京都八丈支庁

基本的情報を収集すべく最初に八丈町役場に行くつもりが、間違えて東京都の八丈支庁に行ってしまった。幸いだったのは八丈島歴史資料館が耐震工事中で、資料の一部が支庁の１階に移されていたことだ。資料館は青ヶ島に行った帰りに１度駆け足で観ているが、改めて見ることにする。入館料は 100 円だった。

入館者は私１人。職員に勧められて八丈島の歴史などを取りまとめたビデオを観る。15 分程度のもので、少々古いビデオであったが八丈島の概要を手短に理解するには都合がいい。続いて室内の展示を見る。

八丈島ではこれまでに 10 ヶ所で遺跡が見つかっている。最も古いのが 1962（昭和 37）年に発掘された湯浜遺跡で、２軒の竪穴式住居跡が発掘された。縄文時代早期（約 7000 年前）のものと推定されており、すでにこのころから南方ないし黒潮に乗って人が移動していたことを物語っている。

その後、湯浜遺跡近くで倉輪遺跡が見つかり、この遺跡から縄文前期末から中期にかけて、つまり 5000～4800 年前の遺物が多数出土し、おまけに埋葬された人骨３体も発見されている。また同遺跡では日本各地の縄文土器が見つかっており、この時代にすでに島伝いに縄文人が移動していたようだ。

法衣の上に西欧風のマントを羽織った珍しい南蛮風羅漢座像が展示されていた。1694（元禄７）年に海中から発見されたものだ。このような洋装の像は 17 世紀後半に外国から持ち込まれたもので、長崎、沖縄、富山の寺にもある。このことは当時から島外との交流が盛んであったことの証左だろう。

この他にも、農林水産業などの島の産業、八丈方言のこと、代表的な流人である宇喜多秀

家、近藤富蔵などのコーナーが展示されていた。

資料館とは別に支庁のコーナーが設けられ、島の基幹的産業である漁業と農業に関する展示物があった。漁業は島の代表的な漁業であるトビウオ刺網、ムロアジ棒受網、底魚一本釣、曳縄釣を紹介したパネル展示と魚食普及に取り組む八丈島漁協女性部の活動が紹介されていた。また農業は島の代表的な収入源である観葉植物５種の実物とその利用方法が紹介されている。展示されていた観葉植物は、ロベ（フェニックス・ロベレニー）、レザーファン、コルディリーネ、ルスカス、キキョウランである。

展示を見てから２階の産業課に行き、水産係を訪ねたが、職員全員が外出していて不在だった。

東京都八丈支庁の建物（左）、同支庁内に設けられた八丈島歴史民俗資料館の展示（右）

八丈町役場

続いて近くにある八丈町役場に行く。庁舎には多目的ホール（愛称おじゃれ）が併設されている。なかなか素敵な建物で、2015 年度にグッドデザイン賞に選ばれている。

築 50 年以上を経過して老朽化した旧庁舎の建て替えに伴い、新たにこの地に整備したものである。2013（平成 25）年から供用が開始された。２階の企画財政課に行き、町政要覧をもらう。

八丈島は三根（みつね）、大賀郷（おおかごう）、樫立、中之郷、末吉の５つの地区で構成される。令和５年２月末時点の住民基本台帳上の各地区の世帯数と人口は下記のとおりで、三根地区が最も多い。島の南側に位置する樫立、中之郷、末吉は少ない。

三根：2,022 戸、3,417 人、大賀郷：1,386 戸、2,298 人、

樫立：266 戸、456 人、中之郷：361 戸、634 人、末吉：165 戸、239 人

八丈島のピーク時の人口は 1950（昭和 25）年の 12,887 人であった。2020（令和２）年の国勢調査時の人口は 7,042 人だったから、ピーク時の半分ほどに減っている。

1954（昭和 29）年に八丈小島の鳥打村と三根、樫立、中之郷、末吉の各村が合併して八丈村になり、翌 1955（昭和 30）年に大賀郷村と八丈小島の宇津木村を編入して、町制を施行し、現在に至る。なお、八丈小島は東南部の宇津木村と北西部の鳥打村に分かれていた。

島では、北側の八丈富士の周囲を坂下、三原山の周囲を坂上と呼ぶ。坂下は三根と大賀郷の両地区を指し、人口が多く、行政や商業が集積しているのでいわば都会であるのに対し、坂上は樫立、中之郷、末吉の３地区を指し、人口が少なく、人間関係も濃密である。坂下と

坂上をつなぐのが西の大坂トンネルであり、東の登龍峠（のぼりりゅう）である。

役場から少し離れた中之郷と三根の境あたりに町立八丈病院、保健福祉センター、コミュニティセンター（以下コミセン）、スカイタウンという町営住宅などがかたまっている。図書館が置かれているコミセンには、体育館、テニスコートが整備され、図書館の２階にはボーリング場もある。いまどきボーリングをする人は少ないと思われるのだが、ブームだったころにつくられて、今なお活躍している。町の施設としてボーリング場のある自治体は全国的に見ても稀な存在だろう。

図書館は本館と別館の２ヶ所に分かれていて、郷土資料関係の図書は別館に置かれていた。ここで近藤富蔵が著した「八丈実記」、町の教育委員会が編纂した「八丈誌」、名著出版から復刻された「月刊島」（出版元：一誠社、創刊は昭和８年５月）を見る。「月刊島」は柳田国男が編集に関わっていたようで、柳田による「漁村語彙」を連載していた。1934（昭和９）年ごろの数年間に発刊されたものだが、恐らく戦時色が強まるなか、数年で廃刊になったものと推定される。

「八丈誌」の産業について書かれた部分のコピーをとってもらう。コピー代は１枚 30 円であった。

八丈町役場（左）、八丈町コミュニティセンター（右）

焼酎

護神山公園の入口付近に「島酒之碑」が立つ。当時６社あった焼酎の蔵元が八丈島に焼酎の製造法を伝えた丹宗庄右衛門秀房（たんそうしょうえもんひでふさ）の功績を称えて設置したものだ。玉石の上に焼酎の運搬に使われた甕が並べられ、その上に特大の甕が置かれている。

伊豆諸島の大島、新島、神津島、三宅島、青ヶ島では焼酎がつくられているが、その大元は八丈島であった。八丈島から島伝いに製造技術が伝播したのである。

「八丈島甘藷由来碑」によると、八丈島にサツマイモがもたらされたのは 19 世紀前半のことで、1811（文化８）年に新島より「赤さつま芋」、1822（文政５）年に「ほんす種」が導入されている。なお、八丈島では、サツマイモのことを「かんも」という。これは唐芋が訛ったものだろう。

八丈島は伊豆諸島で唯一米が採れた島だったがその量は僅かで、サツマイモは常に食糧難に悩まされてきた八丈島の人々の生活を救った。島民は麦、粟、里芋がメインにしていたが、サツマイモの伝来により、飢饉の回数と被害が減ったばかりか、人口も増えるという食

料革命が起こったのである。

当時、米は貴重品であった。したがって島での日本酒製造は固く禁じられていたのである。

そんな折、1853（嘉永６）年に芋焼酎の本場である薩摩から廻船問屋の丹宗庄右衛門が密貿易の罪で八丈島に流されてきた。丹宗は郷里の薩摩から焼酎製造用の道具一式を取り寄せ、八丈島に芋焼酎の製造技術を伝えたのであった。

以来、焼酎は八丈島に定着し、原料に麦も加わり、現在は芋、麦、そして両方のブレンド品の３種類の焼酎がつくられている。碑がたてられた当時、八丈島には６つの酒蔵があったが、現在は樫立酒造㈱（島の華）、八丈興発㈱（情け嶋）、八丈酒造合資会社（八重椿）、坂下酒造㈱（黒潮）の４社に減っている。このうち八丈酒造の「八重椿」を夕食時に宿で飲んだ。

役場の統計によると、2020 年度の八丈島の焼酎生産額は約 1.8 億円で、島外にも出荷されている。

「島酒之碑」から玉石の階段が続く。山のてっぺんにコンクリート製の神社が建っていた。

この護神山が三根と大賀郷（おかごう）を分ける境になっており、三根側に東京電力の発電所、町立八条病院、保健福祉センター、コミュニティセンター、町営住宅などがまとまっている。

護神山公園に置かれている「島酒之碑」（左）、山の上の護神神社（右）

流人

焼酎づくりは流人が伝えたものであったが、これはほんの一例で八丈島は多くの流人がやってきて、新たな知識や技術、情報を島にもたらした。

江戸時代、流刑は死罪に次ぐ重い刑罰であった。江戸近辺の流刑地は伊豆諸島で、資料館の資料によると、島別の流人数は大島約 150 人、利島約 10 人、新島 1,333 人、神津島 83 人、三宅島約 2,300 人、御蔵島 50 人、青ヶ島５人、八丈島約 1,900 人とされており、八丈島は三宅島に次いで流人が多かった。なお、1796（寛政８）年以降は江戸に近い大島や小さな島は除外され、新島、三宅島、八丈島の３島が流刑地になっていた。

八丈島における流人の第１号は、関ヶ原の戦いで敗れた宇喜多秀家であった。当時としては超大物である。その後、1606（慶長 11）年から遠島が廃止される 1871（明治４）年までの 265 年に八丈島には約 1,900 人の流人が送られてきた。江戸から最も遠い八丈島は宇喜多秀家に象徴されるように政治犯が多かったようで、武士や僧侶、知識人が多数に及んだ。このため、流人は島に大きな影響を与えたといわれている。

各奉行所で遠島処分になった流人は小伝馬町の牢屋敷で待機し、民間の廻船で品川沖から浦賀まで行き、伊豆半島を経て三宅島に入った。その後、風待ちをして八丈島に渡ったのである。ただし船中や三宅島滞在中に死亡した人も相当数いたようだ。

流刑は基本的に無期刑であったが、慶事などの機会に恩赦を受けることがあり、八丈島ではソテツの花が咲くころに恩赦の通知が来るといわれていた。そこからソテツの花は赦免花といわれたらしい。「嬉しさを人にも告げんさすらへのみゆるしありと赦免花咲く」の和歌が残されている。やはり資料館の資料によると、赦免になった者は 489 人とされている。

流人の代表的な人物に「八丈実記」を著わした近藤富蔵がいる。「八丈実記」は八丈島だけでなく伊豆諸島から小笠原諸島に至る歴史、風俗、習慣などをまとめた貴重な書物で民俗学的価値が際立って高い。

近藤富蔵は千島や択捉島を探検した近藤重蔵の長男で、1826（文政９）年に父親の屋敷の境界争いから７名を殺傷し、八丈島への流罪の判決が下り、翌年、23 歳の時に八丈島に流された。

島では間もなく結婚して一男二女をもうける。1946（弘化３）年に長男に先立たれるがその翌年（42 歳）から「八丈実記」の執筆を始めた。そして安政２年、51 歳の時に一応完成をみる（28 巻）。その後、加筆修正し、56 歳の時に書き終わった。

1880（明治 13）年に赦免となったから 53 年間を八丈島で流人生活を送ったことになる。赦免後いったん本土に戻り、父重蔵の墓参と西国巡礼を終えた２年後の 1882（明治 15）年に再び八丈島に戻り、1887（明治 20）年に島で 83 年の生涯を終えた。

この八丈実記は死後すぐに東京府に買い上げられ、現在、東京都の重宝として東京都都政資料館に所蔵されている。原本は渋沢敬三によって写本が複数作成され、渋沢以外に柳田国夫、折口信夫がそれぞれ保管していた。その後、渋沢敬三を代表とする八丈実記刊行会の写本をもとに緑地社が 1964～1976 年にかけて全７巻にまとめて刊行された。

この本が八丈島の町立図書館に保管されており、実物を見た。全７巻の構成は次のようになっている。

第２巻：伊豆諸島と小笠原諸島について記述（大島、新島、上津島、利島、三宅島、三倉島、八丈嶋、小嶋、青島、小笠原島）

第３巻：代官役人、村々役名、島人系譜１，２、戸籍、八丈嶋年代記

第４巻：聞斎見聞家系私話　配流１、２　遷徒一伎伝

第５巻：神道１，２，３　仏教、遷徒一伎伝　被迎渡書

第６巻：教育１，２、公文記録、総目録、抜書１、２、天変地災諸病

第７巻：補遺１、２

神湊漁港と底土港

コミセンの図書館でコピーをとってから昼食場所を探しがてら神湊（かみなと）漁港（第４種）に行った。神湊漁港は陸地を掘削した掘り込み港で、1988（昭和 53）年に 110×90ｍの泊地を完成し、供用されている。この漁港拡張によって漁船の大型化と利用漁船数の増加が図られている。海と接する側の防波堤は 10ｍ以上の高い壁になっていて、台風時の波浪の高さを物

語っている。

港内には７～８隻の漁船が係留されているだけで少ない。この日は静穏だったので、多くの漁船が出漁していたようだ。港にいた人に聞くと、漁船は 13 時ごろから港に戻り始め、16 時ごろにピークになるという。漁港用地内には荷捌場、漁協の事務所、製氷施設、斜路などが整備されている。

海岸沿いの道路を南下して地方港湾の底土港に向かう。漁港のはずれに「抜舟の場」と書かれた石碑が置かれていた。流人のなかには漁船を盗んで島を脱出しようとする者もおり、これを抜舟と呼んだ。この場所は漁船が多く、また北側に面していて島から脱出するには好都合だったらしい。案内板によると、脱出を試みた漁船は 11 回を数えたそうだが、成功したのは１例だけで、ほとんどは捕らえられ、あるいは波にのまれて失敗したとのことだ。

道の途中に廃墟となったホテルがあった。敷地は広く、大きな建物で中央にドームのような塔が建つ。八丈島から戻って調べてみると、「八丈オリエンタルリゾート」というホテルだった。1968（昭和 43）年に開業し、2006（平成 14）年に廃業したようだ。以来、そのまま放置されてきた。1960 年代の八丈島は首都圏からの新婚旅行先として人気が高かった。最盛期には年間 20 万人の観光客が訪れている。海外旅行が高根の花だった時代、「日本のハワイ」と呼ばれ、観光需要が旺盛だったのだが、やがて海外旅行が安くなり、八丈島はその地位を失う。このホテルの盛衰は八丈島観光を象徴しているようだ。

神湊港は 310mの岸壁が整備され、東海汽船㈱の「橘丸」（5,681 トン）が就航している。また青ヶ島との間に伊豆諸島開発㈱の「あおがしま丸」（460 トン）が週に４～５日就航している。港は改修工事が行われているようでたくさんの波消ブロックがヤードに並べられていた。また多数のコンテナも並ぶ。

港には船客待合所が整備され、その屋上からは港周辺の景色を一望できる。港の北側には階段護岸が整備され、海水浴場になっている。

神湊港から島一周道路に向けて一直線の道が続く。一周道路との交差点付近に青ヶ島の帰りに八丈島に泊まった際、夕食を食べた「梁山泊」があった。ここの夕食は郷土色豊かで魅力的だったので、昼食を食べようと思っていたのだが、残念ながら昼食はやっていなかった。続いて空港のレストランに行ったが、長い行列ができていたので断念。オフシーズンでランチを提供する店は少なく、ようやく見つけた「蓮華」という中華料理店で味噌ラーメン（750 円）を食べる。

廃墟となった八丈オリエンタルリゾート（左）、神湊港脇に整備されている海水浴場（右）

宇喜多秀家

八丈中央道路を観光協会の前で左折し、家庭裁判所と八丈島区検察庁を過ぎたあたりの道路脇に墓地があり、「宇喜多秀家の墓」と書かれた案内板があった。宇喜多秀家は八丈島の流人第１号になった人物であることはすでに述べた。

宇喜多秀家は宇喜多直家の子で、1581（天正９）年に父の病没により９歳で家督を相続した。翌年、毛利征伐のため出陣してきた羽柴秀吉（豊臣秀吉）に気に入られ、養子扱いの厚遇を受ける。本能寺の変ののち、秀吉の天下取りの戦いに積極的に参戦、数々の戦功を挙げ、天下統一後は備前国・美作国・播磨国西部と備中国東部の 57 万４千石を知行する大大名に躍進した。1589（天正 17）年には、前田利家の娘で秀吉の養女となった豪姫を正室に迎えている。文禄の役（第一次朝鮮出兵）では元帥を務め、戦後その功により中納言に昇進。さらに、徳川家康、前田利家らとともに豊臣政権の最高機関である五大老に任じられ、名実ともに政権の実力者に名を連ねた。

ところが 1600（慶長５）年の関ヶ原合戦では西軍の主力となって奮戦するものの、壊滅・敗走し、薩摩の島津家へ逃れた。３年後に幕府に出頭する。死罪を免れたものの子息の秀継をはじめとする乳母ら一行 13 人と共に八丈島へ流された。島にあること約 50 年、1655（明暦元）年に 83 歳でこの地に没した。なお配所の宇喜多一族には、豪姫の実家・前田家や旧家臣・花房家から援助が続けられたという。

維新後の恩赦で、秀家の遺族７家 75 人は出島を許され、1870（明治３）年に秀家の妻の実家である前田家邸内（現板橋区）に急造された共同長屋に移った。

この墓石は死後 200 年ほど経った 1841（天保２）年に子孫が建てたものらしい。当初の墓石は位牌型で、現在地より西北方にあったが、この時に五輪塔型の墓石がこの地に建てられたと東京都教育委員会の案内板に書かれていた。

周辺は一般の墓地になっており、宇喜多秀家の墓石の近くに浮田家と書かれた墓石があったので、宇喜多の子孫かもしれない。

宇喜多秀家の墓

玉石垣とふるさと村

宇喜多秀家の墓の先に歴史民俗資料館が置かれているが、耐震工事と付属施設の建設工事のために 2024 年９月末まで休館中であった。展示物の一部は東京都八丈支庁の１階に移されていることは先に述べたとおりである。この建物は旧八丈支庁庁舎で、1971（昭和 46）年に移転したのち、資料館として活用されていた。ここから大里の玉石垣にかけての一帯はかつて島の行政の中心であった。

八丈島の集落の特徴的な景観は玉石を積み上げた石垣である。この石垣が今も大里周辺に残っている。

八丈島の西岸、横間海岸と前崎海岸には砕けた岩が波にもまれて丸くなった玉石がごろごろしている。この玉石のうち奥行約 45 ㎝、胴回り約 90 ㎝の枕状の細長い石を運んでき

て作ったのが玉石の石垣である。１つの玉石を６個の玉石で支える俵積みという方法で積み上げていることから、この石垣は安定している。石垣の角はノミで立体的に加工した安山岩を算木積みにしている。通常、排水や浸透水圧を軽減するために石の裏に砕石を入れるが、この玉石垣は山土を入れるだけで、水抜き穴も設けていない。

この大里では現在無電柱化と道路の拡幅工事が進められているが、この玉石垣は現状保存、あるいは移築保存することで貴重な景観を残すことになっている。

この石垣の近くにふるさと村がある。古い八丈島の民家を移築したものだ。屋根はもともと茅葺であった。７年前に来た時の写真を見ると茅葺だったので、この間にガルバニウムが被せられて、今の形になったのだろう。縁側は細い丸太で作られていた。コロナの影響で建物の内部は公開されておらず、外から眺めるだけであった。

大里はかつて八丈島の政治の中心であった。1528（享禄元）年に小田原北条市の代官・中村又次郎が来島し、ここに陣屋を設けたのが始まりである。江戸時代に入ると、幕府の直轄地になり、ここを島役場とした。明治維新後の 1878（明治 11）年には、八丈島は東京府に移管される。そして、1900（明治 33）年にはこの地に東京都八丈支庁が置かれた。その後、1908（明治 41）年に支庁が向里に移転し、跡地になったものだ。

大里の玉石垣（左）、ふるさと村の建物（右）

優婆夷宝明神社

大里の石垣の近くに優婆夷宝明（うばいほうめい）神社がある。八丈島の開祖と伝えられる八十八重（やそやえ）姫とその子の古宝丸が祀られており、八丈島、八丈小島、青ヶ島の総鎮守で、島で唯一の神社庁が管轄する神社である。八十八重姫のことを優婆夷大神、古宝丸のことを宝明神と呼ぶ。もともとそれぞれを祀る２社に分かれていたが、いつの時代か一緒に祀られるようになり、現在の神社名になったようだ。

創建は 1,000 年以上も前で、延喜式神名帳に記されている大変古い神社である。

神社の石垣には玉石が積まれている。石の鳥居をくぐって玉砂利の境内を進むと、銅板葺きの拝殿があり、右手に社務所が置かれている。手水舎で清め、参拝した。拝殿裏の本殿は石造りであった。本殿が石造りなのは珍しく、初めて見た。

境内にはご神木のソテツの大木が八方に伸びていた。樹齢は 700～1000 年といわれており、町の天然記念物に指定されている。

優婆夷宝明神社の周囲には松尾神社、稲荷神社、磯神社、三島神社、戸隠神社の５つの摂

社と末社がある。

優婆夷宝明神社の拝殿（左）、境内にあるソテツの古木（右）

八重根漁港

優婆夷宝明神社から都道 215 号（八丈一周道路）に出て、八重根漁港（第４種）に行った。八重根漁港は神湊漁港と同様、陸域を掘り込んでつくった漁港である。漁港の法面の高さはゆうに 10mを超す。外洋の孤島である八丈島の台風時の波浪はすさまじい。しかも島の周囲は急深であることから、外に向けて防波堤を建設するとなると、多大なコストと難工事を伴う。掘り込み式の方がたぶん安価で確実だったのだろう。ちなみに沖縄の北大東島と南大東島の漁港も掘り込み式である。

1985（平成 60）年に掘り込み式の拡張計画が決まり、翌年、工事に着手したが、工事現場から遺跡が発見されたため工事を一時中断。1993（平成５）年に完成したものだ。

漁港にはトローリング用の竿をたてた曳釣りの漁船が９隻並んで係留されていた。また幅広で高さのある斜路も整備されている。しかしここには大中２隻の漁船が陸置きされているだけで閑散としていた。

八丈島の漁港整備は進んでいる。漁港の整備は漁船の大型化と漁船数の増加をもたらし、島の漁業振興に大きく貢献してきた。財源が豊かな東京都だから可能だったのだろう。

八重根漁港に係留されている曳釣りの漁船（左）、水揚げされるカツオ・シイラ、キハダ（右）

荷捌場では１隻の曳釣りの漁船が水揚げ作業をしていた。けっこう豊漁で、カツオ、シイラ、キハダが次々の船倉から出されてくる。３魚種以外では１尾だけハチビキ（アカサバ）も混ざっていた。水揚げされた魚は塩化ビニール製の樽に頭を下にして積まれ、上から氷を

かけられていく。そして冷蔵庫に収納された。翌朝の東海汽船の船に積み込まれ、翌々日に豊洲の市場に入荷することになる。この曳釣り漁船は若い人との２人乗りで、漁港から２時間ほど走ったところに設置しているパヤオ周辺で釣ったものだという。

八重根漁港の隣が地方港湾の八重根港である。溶岩の海岸に長さ 200mほどの突堤が造られていて、陸上部には船客待合所が整備されている。反対側の底土港が風や波浪の影響で使えない場合の補完港として位置づけられている。ちなみに八重根港が利用される頻度は月に３～４回程度らしい。

八丈小島

八重根港から島一周道路を時計回りで周回する。道路の左手には常にピラミッド型をした八丈小島が視界に入ったままだ。

八丈小島を望む南原千畳敷には「八丈小島忘れじの碑」が置かれていた。元鳥打村の村長だった鈴木文吉氏が詠んだ詩が書かれていた。「五十世に暮らしつづけた我が故郷よ　今日を限りの故郷よ　かい無き我は捨てされど　次の世代に咲かして花を」。この碑は旧島民らによって 2014 年 11 月に建てられたものだ。

隣に、「南風だよ　皆出ておじゃれ　迎え草履の　紅鼻緒」と書かれた野口雨情の詩碑も建つ。八丈島は女護ヶ島といわれ、男女が一緒に住むと海神様の祟りに会あうという言い伝えがあり、女性は八丈島に男性は青ヶ島に分かれて住んでいたといわれる。南風の日和のいい日に八丈島の女たちが青ヶ島の男どもを迎えた情景を、野口雨情が 1930（昭和５）年に来島した時に詠んだものだ。野口雨情は島が好きだったようで、徳島県の手羽島でも彼の詩碑を見たことがある。こちらの碑は「忘れじの碑」よりも前の 1988 年に建てられている。

八丈小島は面積 3.07 ㎢で、標高は太平山の 616.8mに及ぶ。太平山を挟んで北西側に鳥打村、反対側の南東側を宇津木村という２つの集落があった。古くから人が住んでいて、安永年間（1772～80）には 50 戸 423 人、天保年間（1830～44）には 60 戸 513 人を数えた。島の周囲は海蝕崖が続くため２つの集落を結ぶ海岸沿いの道路はなく、大平山を越える山道しかなかった。

飲料水は天水に依存し、麦やサツマイモを主食とする自給自足の生活を営んでいた。僅かな現金収入源はテングサであった。戦後の一時期は酪農が導入され、バターが収入源となったこともある。島には小中学校もあったが、八丈島との間に月に４便の定期船があるだけで、孤立した貧しい環境に置かれていた。戦後は人口流出が止まらず、1969（昭和 44）年に全員が離島して、以後、無人島になった。離島直前の人口は宇津木村が９戸 31 人、鳥打村が 15 戸 60 人であった。なお八丈小島の全員が集団移転したのは全国初の出来事であり、その後に続く集団離島の先例となった。

八丈小島にはバク（マレー糸状虫症というフィラリアの一種）と呼ばれる風土病があった。佐々学は島のフィールド調査を通じてこの病気を明らかにし、この研究が日本国内に残っていたフィラリア症の根絶に向かう契機になったといわれている。ちなみに佐々さんとは 1980 年に開かれた日米民間環境会議で日本代表団に同行して訪米した折、面識があり、当時はこのような業績のある高名な研究者とは知らなかった。

大潟園地や南原千畳敷などの観光地を抜けると建物はなくなり、もちろん人家もない。そ

して車の通行もほとんどなくなった。

西方に横たわる八丈小島（左）、南原千畳敷に建つ「八丈小島忘れじ」の碑と八丈小島（右）

島北部

八丈富士の麓を回る都道 215 号（八丈一周道路）を三根に向かう。

南原千畳敷は、八丈富士が最後に噴火した時（1605 年）に、流出した溶岩が海岸までせりだした場所で、比較的広い原野が続くが、船付鼻から先は海蝕崖となる。道路は海岸から少し離れた高台を走る。

この北西部一帯は永郷と呼ばれ、かつて開拓民が集落を形成していた。道路脇に「大賀郷小学校永郷分教場跡の碑」と書かれた石碑が建っていた。大賀郷永郷地区・永郷会が 2003 年に建立したものだ。この石碑によると、分教場は 1917（大正６）年に開校し、1957（昭和 32）年に閉校している。後述するように小学校は永郷小学校として独立し、大越園地の方に移ったためだ。

永郷とは家居郷が転訛したもので、人々は溶岩に覆われていない古い土壌が露出している場所を開墾して居住したのである。

分教場を引き継いだ八丈町立永郷小学校は 1957（昭和 32）年度から 1974（昭和 49）年度まで存続した。この 18 年間に 98 名が巣立っていったと、跡地記念碑に書かれていた。閉校当時の児童数は４名であった。

この小学校跡は現在大越園地として整備されている。旧小学校の校門はそのまま残されているが、園地内には展望台や休憩舎がつくられ、校庭などは木々に埋もれている。少し離れたところに 1961（昭和 36）年４月に初点灯した大越鼻灯台が見える。

道路を挟んだ山側の斜面にはキダチアロエとアロエベラが植えられ、群生している。「アロエ園」と呼ばれているようだ。アロエ園の付近から明日葉を摘み、手にした女性が出てきた。明日葉は摘んではいけないと看板が出ていたが、今晩のおかずにでもするつもりなのだろう。永郷地区のことを聞くと、島外からの移住者でわからないとのこと。私はアロエを摘んで苦い果肉を少し食べた。

このアロエ園から八丈富士を周回する鉢巻道路につながる道路が延びている。山には向かわず一周道路を進む。ここを境に旧三根村に入る。

神湊漁港に近づくと赤い屋根と白い壁の建物が見えてきた。リードパークリゾート八丈島である。おそらく八丈島で最も高級なホテルだろう。近くに牛（ジャージー種）が放牧さ

れていた。

キダチアロエが群生するアロエ園（左）、旧永郷小学校の跡地に残る校門（右）

八丈島漁協

神湊港漁港に 16 時ごろ着いた。ちょうど操業を終え戻って来る漁船が多い時間帯になっていた。荷捌場ではちょうどキンメダイが水揚げされており、漁協の職員が計量、氷蔵、箱立の作業をしているところだった。少し現場の作業を見学してから３階の事務所が上がり、話を聞いた。比較的若い職員が対応してくれた。

戦後、八丈島では旧村単位に漁協が組織されていた。1973（昭和 48）年に大賀郷、中之郷、末吉の３漁協が合併し、八丈島漁協が発足する。三根漁協はこの時に漁港合併には参加せず、2001（平成 19）年になって合併に参加し、全島が１漁協になった。現在、八丈島漁協の本所は、旧三根漁協の神湊漁港に置かれている。

八丈島漁協の組合員は正が 106 人、准が 472 人の合計 578 人である。組合員は４つの漁業地区に分かれているが、最も多いのが本所のある三根地区で正組合員数は 69 人（58 隻）だ。支所のある大賀郷地区（八重根漁港）は 37 人（52 隻）だが、この中には中之郷と末吉の両地区が含まれる。2018 年漁業センサス時の漁業経営体数は中之郷地区が１経営体、末吉地区が６経営体だったから、正組合員数はこれに近いだろう。つまり支所の中で正組合員数が最も多いのは大賀郷地区ということになる。

漁協では購買、販売、指導、製氷などの各種事業を営んでおり、漁協の職員は 15 人で、本所に 10 人、八重根の支所に５人が配置されている。

八丈島で営まれている漁業は、底魚一本釣漁業と曳縄釣漁業がメインである。

底魚一本釣りはキンメダイを対象としており、周年操業だ。日帰り操業が基本であるが、泊まる場合もある。年間の出漁日数は 130 から 150 日という。

曳縄釣はカツオとマグロが主な漁獲物で、２～５月が盛漁期になる。漁場は島から近く、日帰り操業である。単独ないしは２人で操業する。

この他にトビウオ流刺網（漁期：２～５月、６～７人の夜間操業）、ムロアジの棒受網（漁期：８～12 月、６～７人の日帰り操業）の各漁業があるが、後述するようにトビウオ、ムロアジともに資源が激減しており、実質的に営まれていないのが現状だ。また潜水による採貝藻漁業では、テングサとトコブシを中心に漁獲していたが、近年は磯焼けが進んで資源が極端に減少、やはりほとんど営まれていない。

キンメダイ釣りは38～40隻が周年操業している。単独操業と２人乗りに分かれる。昨年は約42トンを水揚げたが、本所が35トン、支所が７トンの内訳だった。１本の糸に40本の枝針をつけ、餌は主としてイカを使う。しかし５～６年ほど前からサケの皮にフェルトを巻いた疑似餌が増えているという。底魚一本釣ではキンメダイの他に、メダイやオナガ（ハマダイ）なども釣れる。

曳縄釣はカツオ、キハダ、シイラがメインで、10隻ほどが営む。今年のカツオは形が小さいという。例年ならば今時分は３kgが中心サイズになるのだが、今年は1.5～２kgのものが中心らしい。しかもカツオの漁獲量は少なくなっているという。なおキンメダイ釣りと曳縄釣りは兼業している人も多く、漁模様でどちらの漁業をするか判断しているようだ。

トビウオの漁獲はこの２年間ゼロであった。メインのハマトビウオは20年周期で資源変動を繰り返す典型的なレジームシフト種といわれており、現在は資源の大底期にあたるそうだ。したがって資源が回復する可能性は高いわけで、資源回復の暁に漁業の担い手がいなくなっては困るため、東京都ではトビウオの流し刺網漁業の技術を継承すべく３経営体に対して資金を援助し、いわゆる「試験操業」を実施している。資源が高水準にある時は１回の操業で２万尾ほど獲れたようだが、昨年は20尾、今年になっても30尾ほどの水準にとどまっているという。

ムロアジの棒受網も10年ほど前から不漁が続いている。高齢化が進み、しかも不漁が続くことから操業する船は５～６隻ほどに減少しているらしい。一方、テングサはこの25年ほどほとんど採れていない。海藻が生えないからこれを食べるトコブシや現地でメットウ（ギンタカハマ）と呼ぶ巻貝もほとんど獲れていないそうだ。大島は今でもテングサが採れているが、三宅島は採れなくなり始めており、不作地が次第に北上しているという。

以上のように八丈島の漁業はキンメダイ釣りによって支えられていると言っても過言ではない状況なのだ。

少し以前の八丈島漁協の水揚金額は10億円以上あったが、最近は７～８億円で、右肩下がりで推移している。このうちキンメダイが圧倒的に多く４～５億円、その他が３億円ほどという内訳だ。漁家数の減少が大きく影響している。ちなみにピーク時の水揚金額は1982（昭和57）の20.7億円であったから、当時から比べると1/3ほどになっている。これはハマトビウオやテングサがほとんど獲れなくなったことが影響している。

神湊漁港の荷捌場（左）、水揚げされたキンメダイの箱立作業をする組合職員（右）

農業の生産額は18億円ほどなので、農業の1/2にも満たない状況が続いていることにな

る。また、後述するクサヤの原料であるムロアジやトビウオの不漁が続いていることから、島の水産加工業も大きな打撃を受けている。

厳しい漁業環境が続くなか、漁業就業者は年々減少している。こうしたなか、島外から毎年数人の漁師志願でやって来るそうだ。ただ主力のキンメ釣りの船は歩合制なので給与が安定しない。このためやめていく人も多いという。Ｉターン者で漁師になった正組合員は10人ほどとのことである。

八丈島で獲れた水産物は９時40分に出発する東海汽船の船に積まれて、その日の夜竹芝桟橋に着き、翌朝、豊洲市場に出荷される。したがって組合員は夕方までに帰港し、漁協が荷受をして箱立後、冷蔵保管する。

キンメダイ

漁協事務所で話を聞いてから荷捌所に戻ると、キンメ釣りの漁船・吉栄（きちえい）丸（9.7トン）が入港してきた。

奥さんと小さな子供（未就学児）、父親（84歳）、そして壮年の男性の計５人が釣ってきたキンメダイの水揚げ作業を始めた。父親と壮年男性が氷蔵してあるキンメダイを船倉からとりだし、プラスチック製のバイスケに収容、陸揚げする。１籠30kgほどだから結構重い。水揚げしたキンメダイは船長が体長別に、大、中、小、小小の４段階に選別する。サイズを書いた紙を女の子がいわれた通り魚体に張り付けていく。いつも手伝いをしているのか、小さな子供なのに感心する。奥さんは機動部隊の役割で、様々な作業を応援するという役回りだ。

一晩沖で過ごして釣ってきたそうだが、２日間の操業で釣果は500 kgであったから豊漁だったに違いない。船長は上機嫌だった。漁場は島から30～100マイル沖の水深650～800ｍの海域だという。もともと父親と２人で操業していたが、父親が引退した後は単独操業になった。２人で釣れば、今日の３倍は釣れたという。父親によるとキンメダイは水温が低くなると大漁という関係にあり、最近は水温が下がっているらしい。

キンメ釣りの大きな問題点は近年サメが増え、サメによる食害が大きいことのようだ。この日も２割ほどがサメに食われたという。テグスの最上部の針に掛かったキンメダイがサメに食われると、テグス糸が切られてその下の枝針に掛かったキンメダイは海底に沈んでしまうことになるからだ。

キンメダイは瀬付きのものと回遊するものに分けられ、八丈島のキンメダイは回遊してきたものなので回遊によってエネルギーが消費されるから脂の乗りが少なく、単価は安い。漁協が島内向けに販売する時のキンメダイの価格は2,000円／kgらしい。

なお船長はクロマグロも獲っている。しかしクロマグロを２日間で４尾釣った段階で八丈島の枠を満たしてしまったという。サイズは150 kg前後だった。ちなみに八丈島のクロマグロの漁獲枠は11トンに過ぎない。どうもクロマグロの漁獲配分はまき網に多く割り当てられ、釣りの漁師は不利だと嘆いていた。

キンメ釣りの漁師に話を聞いてから、せっかくなので島の温泉に入ろうと、樫立地区にある「ふれあいの湯」に行ったが、揚水ポンプが故障していて休業中だった。仕方なくこの日の宿である八丈島パークホテルに向かった。

船倉からキンメダイを取り出す手伝いの男性（左）、体長測定によりサイズ選別する漁師と子ども（右）

令和５年３月 10 日

観葉植物

８時から朝食を食べ、８時 40 分に八丈島パークホテルを出発した。

宿の周りは林と畑で農家以外の人家は少ない。園芸用のハウスが多く、その一つでトマトを栽培しているおじいさんがいたので話を聞いた。89 歳になるから戦後まもなくから農業に従事していたようだ。今はもう引退していて道楽でトマトを作っているという。

彼によると、戦後まもなくは進駐軍向けにレタスやセロリなどの西洋野菜を作って出荷したという。当時は内地にハウス栽培が普及していなかったので、気候が温暖な八丈島が適地だった。しかし、内地にビニールハウスが普及するようになると、競争力を失った。

続いて、戦前からつくられていたロベ（フェニックス・ロベレニー）（和名：親王椰子）をはじめとする切り葉や観葉植物などの花卉園芸作物が売れるようになり、農業の中心を成していく。おじいさんも西洋野菜に代わってレザーファンを作ったようだ。

周辺の畑や温室には町の花であるストレチア、ロベ、レザーファン、明日葉などが栽培されていた。2020 年の八丈島の農林業の生産額は 18.7 億円で、このうち切り葉が 10.8 億円、鉢植えの観葉植物が 4.7 億円で花卉園芸品が全体の 68.2%を占めている。これに続くのが明日葉を中心とする野菜類で、約 2.1 億円であった（2020 年、八丈町町政要覧）。

町の花・ストレチア（極楽鳥花）（左）、フェニックス・ロベレニーの畑（右）

ちなみに戦前の八丈島は焼畑も盛んであった。島では焼畑のことを山畑、山所、切替畑などと呼んでいた。１～２月に山の木を伐り払い、乾燥させて３月ごろに焼き、そこに粟や稗

の種を蒔いた。粟や稗がよくできない場所ではサツマイモや明日葉を植えた。そして３年後にハンノキを植えて林に戻したという。

おじいさんから八丈島で免許を取った人は路地から飛び出すので、運転には注意するようにと忠告を受ける。

八丈フルーツレモン

この一帯は農業地帯となっているが、数ヶ所で土地を重機で掘り起こし、温室を造成する作業が行われていた。建設途上の温室ではフルーツレモンの苗木が植えられていた。上述したように八丈島の農林業生産額に占める花卉園芸品と野菜の合計は 94.5%を占め、一方果樹は 1,364 万円で、わずか 0.7%に過ぎない。

八丈島の農業は切り葉や観葉植物に大きく依存しているわけだが、将来を考えると需要の増加はあまり見込めないことから、農作物の多様化を図るべく、生産量の少ない果樹に着目したのだろう。

フルーツレモンは 1940（昭和 15）年に八丈島出身の菊池雄二さんがテニアン島から持ち帰ったもので、その後、原木を挿し木にして島内に広まっていた。いわゆる「菊池レモン」として知られるようになった品種である。その後、苗が父島にも渡り、かの地でも作られるようになっていた。

これを東京都農林水産総合センターが樹上で完熟させる作型を研究して、皮も食べられるレモンに作り上げた。八丈島では、一般公募によって「八丈フルーツレモン」と命名され、樹上完熟をこのブランドの条件としている。菊池レモンは通常のリスボン種やマイヤー種に比べて、２回りほど大きく、重量も２倍以上ある。そして苦みが少なく、酸味は弱く、甘みがあり、皮ごと食べられるのが特徴である。オレンジとレモンが交配したマイヤーレモンに近いとされる。

収穫・出荷時期は 12 月下旬から翌年２月ごろである。完熟することで樹皮の糖度があがり、苦みをなくなるようだ。近年八丈島ではこのレモンの栽培に取り組む農家が増えており、現時点で 26 人に及ぶ。2014（平成 26）年から販売が開始され、年々生産量は増大している。少々データは古いが、2017 年は５トンほどを出荷している。八丈フルーツレモンが八丈島の農業の救世主となるのか、期待が集まっているわけだ。

新設された温室に植えられたフルーツレモンの苗木（左）、温室を拡大するための造成工事（右）

八丈富士登山

島の北西側にそびえる八丈富士（標高 854.3m）は伊豆諸島の中では最も高い山である。前回、青ヶ島の帰りに八丈島に寄った時は、時間がなかったので八丈富士に登れなかったが、今回は老骨に鞭打って登ることにした。宿を出発して周辺の農場を見物し、空港でトイレを借りて、八丈富士に向かう。この山は日本離島センターが選定した「しま山 100 選」に選ばれている。

登山口まで車で行けるが、駐車場の標高は 550mほどなので、頂上までの標高差は約 300 mになる。

八丈島は富士火山帯に属する火山島で、西山と呼ばれる八丈富士は数千年前から活動を始めた新しい火山で、山頂に直径 500mの火口がある。近年では 1487 年、1518 年、1522～1523 年、1605～1606 年に噴火している。一方、東山と呼ばれる三原山はすでに長いこと噴火していない。

登山口に竹の杖があった。これを借りて、９時 32 分に登り始めた。火口のある外輪山を周回するお鉢巡りの分岐までは階段が整備され、その脇に階段とは別に側道が設けられている。側道の方が歩きやすいのでそちらを歩く。階段の数は 1,280 段である。100 段登るごとに小休止した。

中間点の少し先に金網の柵があった。柵が何のためにあるのかわからないが、とりあえず閉める。やがて外輪山との分岐に立った。ここまでの所要時間は 55 分。パンフレットには約１時間と書いてあったので、まだ普通の人の脚力が残っていたことになる。

山頂は直径約 400m、深さ約 50mの噴火口になっている。この噴火口を取り巻く外輪山を周回する登山道があり、この道は「お鉢めぐり」と呼ばれている。お鉢めぐりには約１時間を要する。ただ、外輪山は海から強風が吹き上げ、山道は浸食が激しい悪路で、体力を消耗しそうだ。お鉢めぐりはやめて山頂までいくことにした。山頂は外輪山の一部になる。お鉢の分岐点から時計回りに歩き、10 時 56 分、最高点の山頂に立った。分岐から頂上までは 29 分かかった。案内には 15 分と書いてあったので、だいぶ時間を要したことになる。外輪山周辺の植生はツゲとヒサカキである。大木がないから風景を遮るものはない。海と、三根と大賀郷の集落が一望でき素晴らしい眺めであった。写真を撮りながらだったので時間を要したのはやむをえないだろう。

八丈富士の登山道（左）、八丈富士の噴火口と外輪山（右）

内輪山には池がある。また火口への降りることもできるが、時間の関係で、山頂から分岐

に戻り、坂道を飛ぶようにして下った。登山口には 11 時 38 分に着いた。外輪山の分岐から登山口までの下りは 23 分だったから、上りの所要時間の半分であった。

ふれあい牧場

八丈富士への登山口は山を一周する鉢巻道路に面している。登山口から西に走ると、八丈富士ふれあい牧場がある。見晴らしの利く広い放牧場で、現在は観光牧場になっている。駐車場の脇に建屋があり、島における酪農の歴史や古い写真がパネル展示されていた。オンシーズンにはこの建屋内でアイスクリームなどが売られるようだ。建屋から一直線に道があり、その先に展望台が置かれている。放牧されている牛は黒毛和牛ばかりである。八丈島は乳牛を飼っていたはずだが、今は肉用牛に代わっているようだ。ここで八丈島における酪農の歴史を振り返っておこう。

八丈島はもともと牛を飼うのが盛んな島だった。江戸時代の八丈島は牛の飼養が盛んで、1774（安永３）年には 629 戸に対して牛 835 頭、1860（万延元）年には 1,029 戸に対して 1,351 頭が飼われていた。つまり 1 世帯に 1 頭以上の牛が飼われていたことになる。このように多くの牛が飼われていたのは島の風土が適していたことと牧草が豊富で、飼養が内地よりも楽だったからだという。当時、牛は荷物や人の運搬手段、農耕の動力として、また肥料（堆肥）を得るためにも重要だった。さらに飢饉の時は密かに食料となり、人命を救ったのであった。ちなみに八丈島で馬が飼われたことはない。牛の大部分は屋敷内のマヤ（牛小屋）で飼われていたが、一部は山に放し飼いにされていた。

明治末になるとホルスタインなどの乳牛が導入され、牛乳が生産されるようになる。冷蔵施設やコールドチェーンもない時代だから、牛乳の遠距離の輸送は不可能だったので、専らバターが生産された。その後、1916（大正 12）年に八丈練乳㈱が設立され、保存できる練乳に加工され、島外に出荷されるようになる。

その後、練乳会社の存続が困難になり、1939（昭和 14 年）には森永本社に統合される。島に森永乳業の八丈島工場が設立され、バター、チーズ、練乳、粉乳を生産、本社に納入されていた。しかし、戦後、国内各地に酪農業が勃興すると、八丈島は競争力を失い、酪農は衰退していくことになった。

八丈町では伝統ある畜産業による地域振興を図るべく 1965（昭和 40）年度から５ヶ年計画で八丈富士の草地改良事業を実施し、21 牧区総面積 454ha を整備し、八丈島農協が操業を開始した。しかし飼養数は 1970（昭和 45）年の 571 頭から 1990（平成２）年には 147 頭（農家数 15 戸）に減少してしまった。

なお原乳の加工面では、1970（昭和 45）年に森永乳業八丈工場が八丈島農協に移譲される。そして八丈島農協によって毎時生産能力 2,000 本の牛乳処理工場が完成した。1981（昭和 56）年からはパック入り牛乳の生産が開始された。

しかし酪農経営体は減少の一途をたどり島の酪農は衰退、1994（平成６）年には八丈富士の牧野は「ふれあい牧場」という観光施設として一般開放され、現在に至る。さらに 2008（平成 20）年には八丈島農協が牛乳生産・販売事業から撤退した。

このような状況下にあって、島に酪農業を残すべく地域住民有志により㈱楽農アイランドが設立され、かろうじて島内での牛乳生産販売が継続されることになった。一方、「楽農

アイランド」を経営していた小宮山建（たけし）さんは、2011（平成 23）年に島の酪農を残したいと自力で直営牧場「ゆーゆー牧場」を立ち上げる。山坂の多い島の地形に適した自然放牧を始め、牛種はジャージーにした。

しかし事業は行き詰まり、その後、ホテル経営（上述した「リードパークリゾート八丈島」）の歌川真哉さんが楽農アイランドの事業を引き継ぎ、2014（平成 26）年に「八丈島乳業株式会社」を創業。歌川さんは、ホテルで乳製品を提供するとともに、肉牛の飼育や牛糞肥料で野菜も育てている。八丈島の酪農はかくしてかろうじて存続している状況にある。

ふれあい牧場の全景（左）、牧場に放牧されている黒毛和牛（右）

大坂トンネル展望所

八丈富士を下山してから八丈空港道路を経て、都道 215 号に入り、坂上の最初の集落である樫立に向かう。ちなみに島の海岸線を一周する都道 215 号の総延長は 43.1 ㎞である。

島内交通はタクシーとバスのみだ。町営バスは三根と大賀郷の市街地（坂下地区）を走る循環路線と神湊から末吉を結ぶ坂下・坂上路線があり、前者は１日６便、後者は１日７便運航されている。

坂下の大賀郷から坂上の樫立に抜ける道は、三原山の山麓が海岸付近まで伸びているので、交通の難所となっていた。トンネルや橋梁形式の道路ができる以前は、横間海岸沿いを進み、険しい山道をジグザグに登って大阪峠を越えなければならなかった。この難所の区間は横間道路と呼ばれ、1979（昭和 54）年から約 22 億円の事業費と９ヶ年の歳月をかけて第１期工事が完了、その後、橋梁形式の道路が第２期工事（逢坂橋）として 1988（昭和 63）年度から着手され、約 40 億円の事業費と５年 10 ヶ月の歳月をかけ 1994（平成６）年４月に開通している。

その先の大坂トンネルを抜けると樫立に入る。大坂トンネルの長さは 163m で、現在のトンネルは 1990（平成２）年度に完成している。なお大坂トンネルは 1907（明治 40）年に日露戦争の戦勝記念でつくられた古いトンネルであるが、その後、数次にわたり修築されてきた。

このトンネルの手前に展望所が設けられており、八丈島で一番のビューポイントとなっている。展望所からは八丈富士と八丈小島を一望でき、八重根漁港と八重根港が眼下に広がる。展望台の直下は横間海岸で、その背後に観葉植物などを栽培する小さな畑が点在している。

大坂トンネル展望所から八丈富士、八丈小島を望む（左）、眼下に広がる観葉植物の畑（右）

樫立

トンネルを抜けて１kmほど走ると、樫立温泉入口と書かれたバス停があり、山側に少し入ったところに「ふれあいの湯」がある。昨日来たが、あいにく温泉水を汲み上げるポンプが故障しており、休館していた場所だ。

そこから 500mほど進んだバス停が樫立出張所前で、旧樫立村の中心地になる。バス停の前には「樫立住民総会百年記念」と書かれた龍のような石像が置かれていた。付近には駐在所、郵便局、歯科医院などまとまっている。

道路を隔てた反対側に服部屋敷跡がある。服部家の初代は伊豆半島の下田の出身で、２代目からは年貢の黄八丈を江戸に運ぶ船の船頭を代々勤めた家であった。屋敷跡の入口は玉石垣が積まれているが、この石垣は上述した流人の近藤富蔵が築造したらしい。敷地内には樹齢 700 年といわれる大ソテツの木が植わる。現在、屋敷は残っていないが、跡地の広場では古く伝わる樫立踊りや八丈太鼓が演奏され、八丈島の観光地の一つになっている。

樫立住民総会百年記念の像（左）、服部屋敷の入口（右）

樫立の集落は三原山山麓の傾斜地に形成されている。ただ、坂上地区の中では比較的緩やかである。一周道路沿いに住宅が並び、その周囲に段々畑があり、主として観葉植物が作られている。樫立には漁港はない。港をつくろうにも切り立った断崖が続く。したがって漁師はいない。昔から農業が中心だったようだ。

上述したように現在の樫立の人口は 456 人、世帯数は 266 戸である。10 年前の 2012（平成 24）年は人口が 552 人、世帯数が 403 戸だったから過疎化がさらに進んでいる。集落内

には焼酎の蔵元の樫立酒造、郷土料理を食べさせる「いそざきえん」がある。

黄八丈

中之郷の集落は樫立に隣接している。旧村の境を過ぎ、町立三原小中学校の先の左手に黄八丈の染織元・「黄八丈めゆ工房」がある。「ゆめ」ではなく「めゆ」なので注意が必要。室内には７～８台の織機が置かれていた。ちょうど昼休み中だったので、織り子はいなかった。管理人とおぼしき女性が出てきて、黄八丈についての解説ビデオを上映してくれた。

黄八丈は絹を草木染めにして、独特の織柄で織り上げた反物である。

八丈島における養蚕は 1745（延享２）年の古文書に記録が残ることから古い歴史を有する。島には蚕の餌になる桑が豊富にあったためだろう。最盛期の昭和 10 年前期には約 40 トンの繭を生産したと民俗資料館の展示に書かれていた。

江戸時代にはペリー来航に伴う幕府の海防策を批判して八丈島に流された菅野八郎が末吉地区に新たな養蚕技術を伝え、同地区は養蚕産業で栄えたという。また彼は「養蚕八老伝」という技術書を著わしている。

米が乏しかった八丈島ではこの八丈絹が年貢として幕府に納められていた。大奥でも人気を博し、やがて一般に販売されるようになり、明治時代までは島の重要な産業であった。しかし織物の機械化が進み、さらに化学繊維が普及するようになると、伝統的産業は急速に縮小、戦時中はほとんど生産が停止するまでになった。

その後、1947（昭和 22）年に養蚕が再開され、観光客の増加と共に八丈土産として売れるようになり復活を果たす。1974（昭和 49）年に黄八丈協同組合が法人化され、1977（昭和 52）年に「本場黄八丈」の名で国の伝統的工芸品に指定された。また東京都の無形文化財にも指定されている。ちなみに黄八丈協同組合の事務所は樫立に置かれている。

黄八丈は反 50 万円もする高級品で、今日ではほとんど着物は着なくなったから、現在の主流は黄八丈を使った財布などの小物で、八丈島の土産物として売られている。役場の資料によると 2020 年度の黄八丈の生産額は約１億円であった。

めゆ工房の入口（左）、織り掛けの黄八丈（右）

黄八丈に使われる糸は、黄色、樺色、黒色の３色を基調としている。黄色はイネ科のコブナグサ（地元ではカリヤスと呼ぶ）、樺色はタブの木の樹皮、黒色はスダジイの樹皮を原料とする。原料の植物を煎じて、その煎じた液に漬けて干すという工程を繰り返し、ヒサカキと椿の木灰、泥などで媒染する。織模様は、平織と綾織（まるなまこ、市松、たつみ綾の３

種）に分かれる。

ビデオを観てから展示物や土産物を物色していると、観光バスが着き、30 人ほどの団体客が入って来た。皆さん、定年を過ぎた高齢者ばかりである。入れ替わりで工房を後にする。

中之郷

坂上で唯一の信号が中之郷出張所前にある。ここを右折して坂を下っていくと、裏見ヶ滝、裏見ヶ滝温泉、ブルーポート・スパザ・ＢＯＯＮ（休止中）、やすらぎの湯があり、ここから急坂を下り終えたところに中之郷漁港（第１種）が造られている。

Ｌ字型の防波堤の奥が斜路になっているが、この漁港に漁船は１隻もなかった。2018 年漁業センサスでは中之郷地区の漁業経営体は１であったから、おそらく今ではやめてしまったのだろう。外洋に面した解放海岸に漁港をつくったのだから、大変な難工事だったと思うのだが、利用漁船ゼロではその苦労は報われない。

斜路のある位置まで車で坂を下ったが、平らなところが一つもなく、下手をすれば斜路を転げ落ちて海に水没しかねない。気を引き締めて車を回し、脱出する。漁港の上にある「やすらぎの湯」に浸かった。なお、この漁港の上に足湯が置かれている。

樫立と同様、一周道を挟んで山側と海側に階段状に集落が形成され、集落の周辺部に段々畑が広がる。ビニールハウスも多く、主として観葉植物が作られている。

中之郷の集落を離れて、昼食を食べようと一周道路を左折し、山の上の方にある「えこ・あぐりまーと」に向かった。青ヶ島の帰りに寄ったことのある農産物の直売所で、軽食も提供されている。予想に反してあまり食べ物がなかったので、にぎり飯を注文する。ところが冷凍のものを取り出して、電子レンジで温めようとしたので即座に断った。

直売所では明日葉やフルーツレモンの加工品、ジャム類、「島のり」などが売られていたが、品ぞろえは少なく、「島のり」などはどこのものかもわからない。パッションフルーツも売られていたが、小粒で値段も高い。地元の人が買うようなものはなく、観光バスが団体客を連れて来た時に買う人がいるだろうが、正直、魅力はゼロだ。客が少なく商売は難しく、したがって品数が少なく保存の効くものに絞られるという悪循環に陥っている。

この直売所の上には以前東京電力の地熱発電所があった。ところがこの発電所は閉鎖していた。発電所に「地熱館」というＰＲ施設があり、けっこう人が訪れていたから、その帰りに直売所に寄った人も多かったのだろう。その客も来なくなったから直売所の運営は厳しさが増しているに違いない。

地熱発電所は出力が 3,300kw で、1999 年３月に発電を開始しており、八丈島のベース電源として利用されていたが、2019 年（平成 27）年３月に廃止されている。また地熱館も 2021（令和３）年２月から長期休館中になっている。

東京電力としては初めての地熱発電所であったが、福島原発事故による被害補償や廃炉に伴う負担費用の増大などで、東電自体の経営が極めて厳しい状況に置かれていることから地熱発電所を維持するのは難しいという経営判断に至ったのだろう。

その後、町では新たに地熱発電所の建設・運営を行う事業者を公募し、オリックスが選定され、2022 年から運転を開始する予定であった。しかし、未だに閉鎖されたままであるところを見ると、何か理由があったにちがいない。

再び坂を下って一周道路に出る。少し戻ったところに「島ずし」の幟が立っていたので、道路端の地元商店でメダイの「島ずし」を購入し、車の中で食べる。

中之郷漁港（左）、「えこ・あぐりまーと」の直売所と展示場（右）

温泉

八丈島は火山島なので、島の南部の樫立、中之郷、末吉の３地区には温泉が湧く。この温泉は上述した地熱発電所と並行して、八丈町が温泉開発を進めてきた成果で、古くから温浴施設があったわけではない。

観光パンフレットによると、島内には全部で７つの温浴施設がある。全ての施設を車で回ったが、樫立の「ふれあいの湯」と「ブルーポート・スパ　ザ・ＢＯＯＮ」は休業中だった。裏見ケ滝温泉は水着着用の混浴露天風呂、足湯きらめきは足湯のみなので、この２つには入らず、中之郷温泉の「やすらぎの湯」、末吉温泉の「みはらしの湯」、「洞輪沢温泉」の３泉を駆け足で入浴した。

「やすらぎの湯」は湯温が 44.8℃と少々熱い。pH 6.4 で弱酸性の塩化ナトリウム泉で、無色無臭であった。昼間から老人を中心に４～５人の入浴客がいた。

「みはらしの湯」はヨウ素を含む塩化ナトリウム泉で、湯は少し濁る。pH 7.0 で中性である。内湯と露天風呂があり、10 人以上の入浴客がいた。露天風呂の眼下には太平洋が広がり、絶景の湯だ。

中之郷温泉・やすらぎの湯の入口（左）、洞輪沢温泉の浴槽（右）

「洞輪沢温泉」は漁港用地内にある。湯温は 41.2℃と入浴した３つの温泉の中では最も低い。この温泉は末吉自治会が管理しているが、管理人はいない。利用時間は９時から 21

時までで、毎週月曜日が休みだ。利用時間内であれば、自由に入ることができる。料金は無料である。前の２つの温泉に比べると、塩分はかなり低く、水色は黒ずんでいる。温泉成分表によると、ＣａとＮａの陽イオンと炭酸水素、塩素の陰イオンが多い。この温泉には誰もいなかった。

各温泉には町営バスの停留所があり、人口の多い三根と大賀郷の両地区からも老人を中心にバスでここまでやって来るようだ。

末吉

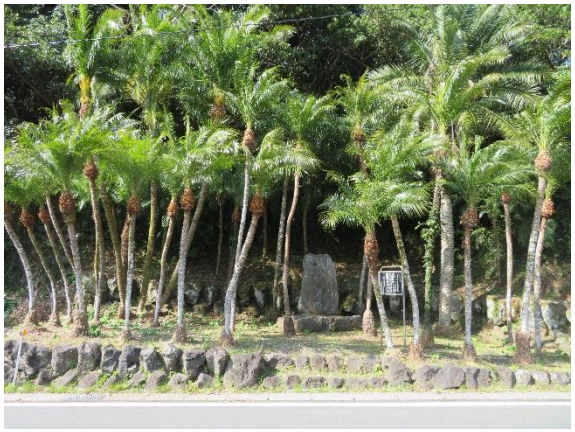
「島ずし」の弁当を食べてから一周道路を末吉に向けて走る。

途中、「しんのうやし雌雄原株」と書かれた看板があり、「ロベ感謝の碑」の石碑も建つ。しんのうやし（通称ロベ）は今や八丈島の農業を支える存在になっているが、その大元になったのが、この原株であった。1921（大正 10）年に横浜植木㈱が初めて八丈島に委託栽培した原株で、この２株から種子を得て、今日のように広まったという。

道路を挟んだ反対側にため池があった。「安川ため池」あるいは「新提（あらつつみ）」ともいうらしい。三原山の山麓は急傾斜なので、大きな河川はなく、降った雨はすぐに海に達してしまう。水田の用水を確保するにはため池が必要だった。18 世紀末には流人であった加藤又兵衛の指導のもとで灌漑用のため池がつくられ、その後、各地にため池が広がった。

この安川ため池は 1934（昭和９）年に造られたもので、貯水量は２万５千m^3と八丈島では最大である。土堰提で取水口は「尺八」という構造物が採用されていると看板に書かれていたが、竹に穴をたくさん開けたものだろうか。

末吉出張所前の道を右折して坂を下っていくと、「みはらしの湯」があり、さらに下ったどんづまりが洞輪沢漁港（第１種）である。背後はほぼ垂直の崖で一部に落石防止のためのネットが張られている。この断崖下に漁港が整備されている。海に面して宿泊施設のような大きな建物があり、その背後の高台に人家や民宿がまとまっている。



しんのうやしの雌雄原株（左）、洞輪沢漁港（右）

漁港の沖には消波ブロックで固めた離岸堤が伸びている。漁港内には５隻の漁船が係留されていた。何れも 10 トン未満である。このうち小さい方の３隻の漁船にはアウトリガーとしてカヌーが取り付けられている。カヌーを取り付けた漁船は南太平洋諸島に多く、わが国では小笠原諸島で見たことがある。大きな斜路には漁船１隻と船外機３隻が陸揚げされ

ていた。

2018 年漁業センサス時の末吉地区の漁業経営体数は６経営体であったから、坂上では最も漁業者の多い地区と言える。この末吉地区にはかつてテングサが多く生育していて潜水漁業で採取されていたが、今は全く見られなくなっている。八丈島でも磯焼けが進む。

末吉地区も中之郷地区と同様、平地はほとんどなく、一周道路の両側の傾斜地に集落が形成されている。上述したようにこの地区は八丈島の中では最も人口が少ない地区である。末吉を後にして一周道路を三根に向かった。

登龍峠展望所

末吉の集落を過ぎると三根までの間、ほとんど人家はなく、つづら折の道が続く。道の山側の土手に龍を象った陶板製のレリーフを２ヶ所で見かけた。

やがて三根地区との境の登龍（のぼりりゅう）峠にさしかかった。この峠の名称を見て、龍のレリーフの意味が分かった。下から峠に登る道を眺めると、龍が天に登るように見えることからいつの時代かに名付けられたようだ。

この峠には展望台が整備されている。標高は約 320m である。ここからは八丈富士、八丈小島、神湊漁港と底土港、そして三根の市街地を一望できる。この場所は、新東京百景に選ばれている。

しばし車を停めて、風景を眺めていると、「黄八丈めゆ工房」で会った団体客がバスでやってきた。入れ違いに八丈島漁協女性部に向かう。

登龍峠から八丈富士、八丈小島を望む（左）、底土港と神湊漁港（右）

八丈島漁協女性部

前日は忙しく対応できないということで、この日の 15 時 30 分にアポイントメントをとっていた。漁協女性部の加工場は「宝亭」という割烹料理屋の道路を挟んだ対面にある。

事務局長の奥山喜久江さんが対応してくれた。40 分ほど話を聞く。加工場の見学を申し出たが、衛生管理上、中に入ることができなかった。窓越しに内部の作業状況を写真撮影したが、帰って確認すると網戸が全面に写っていて使い物にならない代物であった。

八丈島漁協女性部は、2001（平成 13）年の漁協合併に伴って三根、末吉、中之郷の３地区の女性部が一緒になって誕生した。大賀郷地区は「変わり者」で加わらなかったという。三根と大賀郷は漁業に限らず昔から仲がよくなかったようだ。合併当初のメンバーは 203 名

であったが、漁業者の減少と住吉地区が最近脱退したので、現在は 74 名である。会長は 89 歳になる山下ミヤ子さんで、いたって元気のようだ。

女性部の水産加工の歴史はおよそ 20 年前にさかのぼる。女性部活動の一環として、2004（平成 16）年７月に有志９名で「八丈産おさかな研究会」を立ち上げたのが始まりだ。底土港にあった漁協倉庫を改修して加工場を確保、地元で獲れるトビウオやムロアジを原料としたミンチや切り身の加工を開始したのだった。翌 2005 年６月には東京都の支援を受けて学校給食用食材として世田谷区の小学校にトビウオのミンチを空輸した。同年 11 月ごろには出荷体制がある程度整ったことから、行政から東京都学校給食会を紹介され、都内 1,800 校の小中学校に学校給食向け食材の供給が始まった。

その後、離島漁業再生支援交付金を活用して 10 年かけて加工場を段階的に整備し、2010（平成 22）年から現在地に移っている。現在、加工場は 14 人の女性部メンバーで運営しており、このうちの４人はフィリピンの出身者だ。島の漁師と結婚したフィリピン女性で八丈島に来て 20 年以上になる人もいるそうだ。加工場は月曜日から金曜日までの毎日、８時～17 時まで操業している。働く時間はその人の都合に合わせて無理しない範囲で働いている。

加工原料は島に水揚げされるトビウオ、ムロアジ、ナメモンガラ、メダイ、シイラ、キンメダイなどで、キンメダイを除くと安い魚である。ナメモンガラはムロアジの棒受網漁業で混獲される魚で、皮が固いためほとんど市場価値がなかった。しかしフライやミンチにすると美味しい。ただ最近、ムロアジが不漁続きのためこのナメモンガラの漁獲されていない。このように原料魚は低利用・未利用なもので、加工事業はこれらを有効活用したのだ。

加工形態は切り身、ミンチ、すり身がベースで、その派生品として漬物やメンチカツ、コロッケ、餃子などがつくられている。生産した製品は凍結され、マイナス 25℃で保管する。

学校給食は、生魚の処理を禁止、栄養のバランスや食材費の制限、調理時間の制限があり、水産物を扱うことは厳しい条件が課せられているが、このように冷凍することによって、学校給食で扱えるようになった。

販路は、島内向けと島外向けに大別される。島内向けは八丈町給食センターを通じて小中学校に供給されるとともに、スーパーマーケット、居酒屋、空港レストラン、保育園や老人ホームなどである。島外は東京都学校給食会および給食流通業者を通じて都内の小中学校に出荷、さらに都庁食堂、葛西水族館、竹芝桟橋の「東京愛らんど」などの都庁関連施設、民間のレストランなどにも供給されている。

八丈漁協女性部の水産加工場（左）、漁協部の生産している商品の販売用ショーケース（右）

売上額は 2016（平成 28）年度の約 9,000 万円強をピークに減少傾向にある。これは主力原料のトビウオとムロアジが不漁の上、コロナ禍で需要が大きく落ち込んだことが影響しているようだ。加工品販売に占める原料費の割合は約 1/2、漁協の販売数量に占める女性部の仕入れ割合は６～11％であり、島の漁業にも一定程度貢献している。

八丈島漁協女性部の水産加工品が学校給食に受け入れられたのは、「地産地消」や「食育」の大切さが行政によって認識され、東京都の支援が得られた点が大きい。一方、女性部の側も小学生を対象に島の漁業や魚を紹介する出前授業を年 20～25 回開催するなど、商売抜きの対応をしてきた。

クサヤ

伊豆諸島の代表的水産加工品はクサヤである。もともとの産地は新島で、八丈島でクサヤ加工が本格的に始まったのは大正時代のことだから伊豆諸島の中では新興地になる。八丈島でクサヤ加工が産業として成立したのは戦後のことのようだ。

八丈島のクサヤの特徴は、気温が高いため原料魚をつける「クサヤ汁」の塩分が濃く、このため水で十分洗って塩抜きをすることから、伊豆諸島北部のクサヤに比べるとあの独特の臭いが薄いといわれている。

上述したように戦後、八丈島は年間 20 万人を超える観光客が訪れるようになり、土産需要が増加、同時にクサヤの原料になるトビウオと青ムロアジが豊漁だったことからクサヤを製造する会社は増加する。1972（昭和 47）年７月にはクサヤ加工業者を中心とする八丈島水産加工協同組合が設立された。当時の組合員は 26 社であった。

しかし、その後の観光客の減少、近年では原料のトビウオや青ムロアジの極端な不漁で、クサヤ加工を廃業する経営体が増え、現在、クサヤを生産している組合員は三根地区で５経営体（長田商店、杉浦水産加工、中屋商店、丸十水産、マルタ水産）、大賀郷で１経営体（カネワ水産）、中之郷で１経営体（藍ヶ江水産）の合計７経営体になってしまった。このうち中屋商店は創業 100 年を迎えた老舗である。

漁協で聞いたところでは、クサヤの加工業者は高齢化が進んでいて、50 歳代の経営者は長田商店（ヤマサ水産）だけだという。トビウオはすでにこの２年間漁獲がゼロであり、ムロアジも 10 年ほど不漁が続いている。この状態が長引くと、原料を島外から移入しない限り、八丈島のクサヤ生産は息の根を止められてしまうかもしれない。

町役場の統計では 2020（令和２）年のクサヤの生産額は約 4,855 万円であった。

漁協女性部を取材してから、レンタカーを返し、八丈島空港に行き、空港売店で売られているクサヤを片っ端から購入した。購入したメーカーは、藍ケ江水産、杉浦水産加工、㈱仲屋商店、長田商店、㈲カネワ水産、カネワ水産の６社であった。

今日、ラウンドで売っているクサヤは少なく、焼いたものをちぎって真空パックしたものが多い。ラウンドを２品、ちぎったものを４品購入した。最近は住宅事情から、自宅で焼くと付近に悪臭（？）を放つことを心配して買えない人のためにちぎった商品が増えている。

17 時 25 分発のＡＮＡ1896 便に乗る。団体客（島の高校生）がいたこともあり、ほぼ満席であった。空港混雑のため上空で待たされ、かなり遅れて 19 時ごろ羽田空港に着いた。